

老健における音楽療法に関する研究第18報

～個別音楽療法で意思疎通が図れた脳幹出血後遺症の1例～

塩谷 将彦¹⁾ 能見 昭彦²⁾ 美原 淑子³⁾ 美原 恵里⁴⁾

1) 公益財団法人脳血管研究所 介護老人保健施設アルボース 介護福祉士

2) 公益財団法人脳血管研究所 介護老人保健施設アルボース 事務員

3) 公益財団法人脳血管研究所 介護老人保健施設アルボース 音楽療法士

4) 公益財団法人脳血管研究所 介護老人保健施設アルボース 施設長

[はじめに]介護老人保健施設で実施されている音楽療法の多くは、認知症高齢者を対象とした集団セッションの形態が多い。当施設では、このような集団セッションの他、脳血管障害後遺症を有する高齢者に対して個別音楽療法を積極的に行ってきた¹⁾。今回、脳幹出血後遺症による四肢麻痺、意思疎通が困難なクライアントに対し、長期間に渡る継続的な音楽療法、個別セッションを実施し、心理状態の改善を認めたので報告する。

[症例]症例は、48歳、男性。要介護5。X年1月（45歳時）、脳幹出血を発症し、地域の急性期病院に入院、回復期リハビリテーション病棟を経て、X年8月に当施設の利用を開始した。初回入所時、開眼しているがスタッフからの声掛けに眼を合わせようとせず、気管カニューレが装着されており発語は不能、家族以外との意思疎通は困難であった。重度の四肢麻痺で起立不能、膀胱カテーテルが留置され、1日の大半をベッド上で過ごしていた。主介護者である妻は、介護に積極的であり、在宅療養を強く希望していた。そこで、月に1、2回程、レスパイトケア目的の短期入所サービスを利用しながら在宅療養を継続することになった。サービス利用開始当初は、週1回の集団音楽療法に参加していたが、クライアントの表情は乏しく、主介護者からクライアントの好きな曲を演奏して欲しいとのリクエストがあり、X+1年1月より個別セッションを実施することになった。

[方法]クライアントと主介護者の「癒やし」を目的とし、施設内個室において、音楽療法士とクライアント、主介護者の3名による個別セッションを実施した。個別セッション開始直後（X+1年1月）は、月1回、1セッション、15～20分で1曲程度、主介護者のリクエスト曲を音楽療法士がキーボードで演奏、歌唱する受動的音楽療法を実施した。個別セッション開始1年後（X+2年1月）からは、月1～2回、1セッション、40～50分、クライアントの好きだった曲や懐かしい曲4～5曲、演奏した。この頃には、音楽療法士のキーボードの演奏に合わせ、主介護者、クライアントも一緒に歌うようになり、能動的音楽療法の要素も加

わった。X+1年の年間セッション回数は12回、X+2年の年間セッション回数は18回であった。

[評価方法]個別セッション開始1年後（X+2年1月）、個別セッション中にクライアントが曲に合わせて、口や脛、首を動かすようになったため、心理状態を把握することにした。指標は、日本脳卒中学会・脳卒中感情障害（うつ・情動障害）スケール（JSS-D、JSS-E）2）を用い、個別セッション開始1年後（X+2年1月）と2年後（X+3年1月）に評価した。また、2年後（X+3年1月）には、クライアントに対し、「はい」「いいえ」で答えられる聞き取り調査も実施した。

[結果]日常生活における心理状態に関し、JSS-Dは個別セッション開始1年後2.40点、2年後は1.20点、JSS-Eは個別セッション開始1年後1.89点、2年後は1.05点となり、うつ・情動障害ともに改善が認められた。

JSS-Dでは、気分、睡眠障害、表情、精神運動抑制または思考制止の項目で改善が明らかになった。JSS-Eでは、気分、睡眠障害、表情、日常生活動作・行動に関する自発性と意欲の低下、対人関係の項目で改善が明らかになった。

聞き取り調査では、「音楽療法により、身体の一部を動かして、感情を表すことができるようになったか」など、10個の質問に対して全ての確に答えることができた。

2014年7月に開催された当施設の「家族会」で、主介護者が他の利用者家族に対し「音楽療法士の歌声が主人の内側にある感動を呼び起こしている。音楽の素晴らしさが主人に口の動きを与えてくれた」と発表した。

[考察]音楽は、ヒトに対して生理的、心理的、社会的影響を及ぼすことが知られている。クライアントの心理状態に改善が認められたのは、クライアントにとって好きな曲や懐かしい曲、馴染みの曲を聴く、歌唱することにより、その曲から連想される感情が誘発されたものと推測される。さらに、音楽療法士が、クライアントの表情、身体的反応などを感じ取り、共感することで、クライアント自身の感情を他者に伝えたいという意欲が向上したように思われる。聞き取り調査では、クライアントが自分の身体の一部を動かして、質問に回答することができていた。施設生活においても、スタッフとの意思疎通が可能となり、クライアントの生活の質（QoL）は大きく向上したと思われる。実際、介護の現場において、スタッフからの声かけにクライアントは明確な意思表示をするようになり、クライアントの望むより細やかなケアが提供できるようになったと感じられる。

[まとめ]脳幹出血発症後、意思の疎通が困難であった症例に対し、長期間に渡り個別音楽

療法を実施した。その結果、心理状態が改善し、家族以外との意思疎通を図ることも可能となった。脳血管障害慢性期であっても、音楽療法により状態の改善が期待できることを示した症例であり、このような症例に対する個別音楽療法の適応が検討されるべきである。

引用・参考文献

- 1) : 第18回全国老人保健施設愛知大会小出桂子他
失語症高齢者に対する音楽療法の効果コミュニケーション能力が賦活された1例
- 2) : 日本脳卒中学会Stroke Scale 作成委員会編：脳卒中25. 2003